

ミヤコドリ 英: Eurasian Oystercatcher 学: *Haematopus ostralegus*

1. 分類と形態

分類: チドリ目ミヤコドリ科

ミヤコドリ科は、チドリ科に近い独特の形態をもつ小さいグループである(中村・中村 1995)。骨学的形態や行動様式、またヒナの幼綿羽のカラーパターンなどによりセイタカシギ類が最も近縁と考えられている。また、ミヤコドリ科は世界中に広く分布し、1属11種に分類されているが、種間の形態的な差異は少ない。ミトコンドリアDNAの特定領域の塩基配列の差も少なく、ここ1万年ほどの間に種分化したと考えられている(Hebert *et al.* 2004)。

形態:

ミヤコドリ科は比較的大型で頑丈な形態をもつ黒かまたは白と黒の色合いの鳥で、目立つ赤色の目、嘴と脚をもつ。ミュビシギのように足の指は3本しかなく、第1趾を欠き、水かきがある。(中村・中村 1995)。長くて太い嘴は左右扁平で、二枚貝を主に捕食するための適応と考えられる。また、ミヤコドリには、ユーラシア大陸西部から東部にかけて嘴の長さにクラインがあるとされており、日本に渡来する亜種ミヤコドリ *H.o.osculans* が最も長い嘴をもつとされている(Melville *et al.* 2014)。

全長: 452mm (418-480) **嘴峰長:** 96mm (80-110)
翼長: 270mm (255-280) **ふしよ長:** 55mm (50-58)
翼開長: 862mm (797-915) **体重:** 566.3g (487.5-642.8)

榎本 (1941)による。平均値(最小-最大)

羽色:

雌雄同色。頭部、胸部、背面、尾羽は黒色、側胸、腹部の体下面は白色、飛翔時には、腰から上尾筒にかけての白色と翼帯の白色が目立つ。成鳥の夏羽では、嘴、脚、虹彩は赤色になる。冬羽では、嘴は先端であるほど色がくすみ、脚の色も薄い桃色になる。幼鳥では背面は褐色味があり、羽縁が白色または淡色になる。嘴は橙色で先端部がやや暗色になる。脚の色は非繁殖羽に似る。虹彩は加齢とともに鮮やかな赤色になり、幼鳥時は赤黒い。



図1. ミヤコドリ成鳥(上), ミヤコドリ幼鳥(下)

鳴き声:

「ピユイー」、 「ピユ、ピユ」といった声で鳴く。

2. 分布と生息環境

分布:

ミヤコドリは旧北区に広く分布し、ユーラシア大陸西部の沿岸地域、地中海、中央アジアのウクライナ、カザフスタン、ロシア内陸部、中国北東部、ロシア沿海州、カムチャッカ半島の南部などに非連続的に繁殖地が分布する。4亜種に分けられ、カムチャッカ、北朝鮮西部、中国

北東部、クリル諸島で繁殖する亜種 *H.o.osculans* が日本へ渡来するとされている。 *H.o.osculans* の個体数は5,000から10,000羽と推定されており、最大の越冬地である韓国のユブ島には個体群の約50%が越冬するとされている(Melville *et al.* 2014)。日本では、明治期の19世紀末には東京付近でも個体数が多かった(内田 1913)ようだが、1973年~1975年におこなわれた「干潟に生息する鳥類の全国一斉調査」では、全国で1~6羽が記録されており(日本鳥類保護連盟ほか 1976)、希な渡り鳥と認識されていた。しかしながら近年、東京湾、伊勢湾を中心に渡来数が増加している。さらに東京湾では、越冬していると考えられる個体も観察されている。

生息地:

繁殖には、岩石海岸、砂浜海岸、乾いた海岸草原、潟湖など沿岸部の多様な環境を利用する。また内陸でも塩水湖、淡水湖沼、川岸の砂地草原、湿った雑草地なども利用する。越冬地では、海岸からあまり離れず、潮間帯の砂浜、砂利浜、岩礁地などで観察される。

3. 生活史

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
非繁殖期			繁殖期			非繁殖期					

繁殖システム:

一夫一妻で、生涯にわたる長期的な関係であることが多い。越冬地もつがいと同じ場合があり、繁殖地への帰還率も高い。繁殖期は4~7月。

巣:

巣は、草が疎らに生えた露出地の地上につくるが、砂地や岩石地、農耕地、ときには人家の平らな屋根の砂利の上につくることもある。浅いくぼみに、漂流物の破片、小石、貝殻の破片などで産座をつくる。

卵:

一腹卵数は1~4卵で、3卵が多い。形は一般的な卵形で、卵色は薄茶色の地に、こげ茶色の不規則な模様がある。

抱卵、育雛期間:

雌雄で抱卵する。ヒナは24~27日位で孵化し、早成性ですぐに巣から離れる。雌雄で抱雛、育雛をおこない28~32日位で巣立つが、独立にはさらに6週間ほど要する場合もある(Cramp & Simmons 1983)。

非繁殖期:

群れて干潟などで採食し、満潮時には集団で休息する様子が観察される。

4. 食性と採食行動

二枚貝を好んで捕食する。ほかに、ゴカイやカニ、ミズ、昆虫なども採食し、小魚もまれに採食する。日本における採餌環境は前浜干潟が多く、関東近辺では東京湾岸の干潟や九十九里浜などで観察され、引き潮時の汀線付近で採餌することが多い。また、捕獲した貝を波打ち際まで運び、中身を取り出して採餌する行動なども見られる。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 嘴の形状と食性の関係は？

ミヤコドリは前述のように二枚貝を主食としているが、その採餌方法は多彩である。個体により嘴の形状が異なっており、採餌方法や餌を特化させていると考えられている。例えば、嘴の先端が細く尖った形状をしている個体は、砂や干潟をつついてゴカイ類や砂



図2. 貝に嘴を差し込み、採餌するミヤコドリ

の深場に潜っている貝殻の比較的柔らかい二枚貝を採餌するのに適しており、先端が鈍く幅が太い嘴を持った個体は、貝殻を嘴で叩いて突き破り、そこから嘴を差し込んで閉殻筋(貝柱)を裁断する採餌方法に適している。そのような採餌をおこなうことが多い。また、中間の形状をした嘴の個体は、貝の中に嘴をすばやく突き刺し、貝が閉じて嘴に挟まった状態から閉殻筋(貝柱)を裁断して採食するのに適していると考えられている(Swennen *et al.* 1983)。さらに、オスのほうが嘴が太く、メスよりも二枚貝を採餌する割合も高いことや、内陸部で繁殖する個体は尖った形状の嘴を持つものが多いなど、雌雄差や地域差もあり、個体ごとの採餌戦略と密接に関連している(Pol *et al.* 2009)。

● 増えている日本のミヤコドリ

日本に飛来するミヤコドリの個体数は近年増加傾向にあり、モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査第2期とりまとめ(環境省 2015)においても、冬季の個体数が有意に増加した種として報告されている。分布は局所的であり、主に東京湾湾奥部、伊勢湾西岸部でまとまった個体数が越冬している(図3)。東京湾では、湾奥部の三番瀬で1980年代から観察記録はあったが、定期的な越冬が確認されたのが1992年からであり、それ以降個体数が増加し、2004年には100羽超、2014年には300羽を超える数が越冬している(日本野鳥の会東京・研究部 2016)。一方、伊勢湾西岸部では、安濃川河口付近において、2000年以降にミヤコドリの越冬数が増加しており、2011年1月には最大個体数104羽を記録しており、その後も60~100羽程度の個体数で越冬個体群が観察されている(岡ほか 2016)。しかし、日本で越冬するミヤコドリ個体群の繁殖地や中継地は明らかになっておらず、増加の原因も不明である。

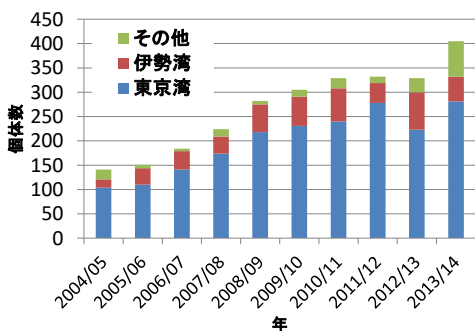


図3. 近年のミヤコドリの国内越冬個体数の変化(環境省モニタリングサイト1000データより作図)。東京湾、伊勢湾は重複を避けるため最大数が記録された調査地の個体数のみを採用。

● 保護上の課題

日本では増加傾向にあるミヤコドリであるが、2015年に発表されたIUCNレッドリストでは、軽度懸念(LC)から準絶滅危惧種(NT)へとランクが引き上げられた(BirdLife International 2015)。ランクアップの主な要因は、ヨーロッパ産の亜種 *H.o. ostralegus* がワッデン海周辺で40%近くも減少したことによるが、東アジアに生息する亜種 *H.o. osculans* についても黄海を中心とした干潟の消失や、主食である貝類の過剰な収穫などの脅威にさらされていることが指摘されている(Melville *et al.* 2014)。

日本での越冬数が増加している一方で、東アジア全体の動向は不明な点が多いため、今後は中国、韓国との情報交換を通じて動向を把握するとともに、日本で越冬する個体群との関連性や、繁殖地・中継地を明らかにすることで、越冬数増加の要因を特定することが重要である。

6. 引用・参考文献

- BirdLife International. 2016. *Haematopus ostralegus*. The IUCN Red List of Threatened Species 2015: e.T22733462A82637840. <http://dx.doi.org/10.2305/IUCN.UK.2015-4.RLTS.T22733462A82637840.en>. Downloaded on 28 December 2016.
- Cramp, S. & Simmons, K. 1983. *Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa: The Birds of the Western Palearctic: Waders to Gulls Vol 3*. Oxford University Press, Oxford.
- 榎本佳樹. 1941. 日本産鳥類の体の大きさ. 野鳥便覧下巻
- Hebert, P.D.N., Stoeckle, M.Y., Zemlak, T.S, Francis, C.M. 2004. Identification of birds through DNA barcodes. *PLoS Biol* 2(10): e312.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2015. 重要生態系監視地域モニタリング推進事業(モニタリングサイト1000)シギ・チドリ類調査業務. 第2期とりまとめ報告書
- Melville, D.S., Gerasimov, Y.N., Moores, N., Yat-Tung, Y & Bai, Q. 2014. Conservation assessment of Far Eastern Oystercatcher *Haematopus [ostralegus] osculans*. *International Wader Studies* 20: 129-154.
- 中村登流・中村雅彦. 1995. 原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編). 保育社, 大阪.
- 日本鳥類保護連盟・日本野鳥の会, 1976. 干潟に生息する鳥類の全国一斉調査報告書3.
- 日本野鳥の会東京・研究部. 2016. ユリカモメ(725): 9
- 岡八智子・西浦征克・今井光昌・安藤宣朗・下村孝嘉・久住勝司・田中洋子・横山真一・前田聡・石原宏・林益夫・中村洋子・西村泉・橋本裕子・世古口有司・平井正志. 2016. 伊勢湾西岸海岸におけるミヤコドリの棲息. *Strix* 32: 107-115.
- Swennen, C., De Bruijn, L. L. M., Duiven, P., Leopold, M. F., & Marteijn, E. C. L. 1983. Differences in bill form of the Oystercatcher *Haematopus ostralegus*; a dynamic adaptation to specific foraging techniques. *Netherlands Journal of Sea Research*, 17(1): 57-83.
- 内田清之助. 1913. 日本鳥類図鑑上巻. 警醒社, 東京. 319pp.
- van de Pol, M., Ens B.J., Oosterbeek K., Brouwer L., Verhulst S., Tinbergen J.M., Rutten A.L., de Jong M. 2009. Oystercatchers' bill shapes as a proxy for diet specialization: more differentiation than meets the eye. *Ardea* 97(3): 335-347.
- Wetlands International. 2016. Waterbird Population Estimates. Retrieved from wpe.wetlands.org on Wednesday 28 Dec 2016

執筆者

澤 祐介 バードライフ・インターナショナル東京

伊勢物語などの古典に出て来る都鳥(ユリカモメ)の調査研究をしているうちに、ミヤコドリまでたどり着いてしまいました。ロシアへの憧れが相当強いので、ミヤコドリの研究を機に、繁殖地のロシアまでミヤコドリ、都鳥ともども飛んでいきたいと思っています。(写真中央が執筆者)

